

Title	中国共産党史研究(石川忠雄著, 慶應通信)
Sub Title	
Author	大沢, 一雄(Osawa, Kazuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.3 (1959. 11) ,p.142(386)- 145(389)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19591100-0142">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19591100-0142</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 中国共産党史研究

(石川忠雄著)  
慶應通信

一九五九年十月一日をもつて中華人民共和國は建國十周年を迎えたが、この中國史上の記念すべき時期に當り、本塾法學部教授石川忠雄氏の「中国共産党史研究」が出版された。

誠に時宜を得たものと云えよう。

本書は著者が、昭和二十八年より三十三年までに「法學研究」「アジア研究」等に發表された論文を収録されたものであつて、既にそのいくつかは、「史學雜誌」「東洋史料集成」等に紹介されている。

しかし、一本となつて刊行され、改めて通讀してみると中國共産党史を、主としてその戦術の轉換期において把握しようとする著者の一貫した問題意識が明瞭に窺われる。

以下、構成にしたがつて、その大略を紹介する。

本書は大別して「中国共産党史概観」「中国共産黨の成立と第一次國共合作の時期」「ソヴェト革命および抗日民族統一戦線」「中華人民共和國の時期」の四篇よりなり、最後に「附篇」が加えられている。

第一篇の「中国共産黨史概観」は共産黨成立以后一九五八年夏の「人民公社」運動に至るまでの共産黨の歩みを概観されたもので、僅か二十頁にしか過ぎぬものであるが、黨史上の重要な事件については勿論のこと、コミンテルンとの關係についても要領よ

くまとめられてをり、他の収録論文に對するイントロダクションの役割を果している。中国共産黨史人門としてもすぐれたものといえよう。

第二篇は「第一次國共合作とコミンテルン」「京漢鐵道と陳獨秀」「武漢政府時代の中國共産黨」の三論文よりなる。

第一の論文では、「國民黨内における國共合作」という合作方式が、一九二三年の「國民黨に對する中國共産黨の問題にかんするコミンテルン執行委員會の決議」までは具體的にコミンテルンによつて指示されていなかった點、及び共産黨側が一九二二年の「二全大會」前後まで「黨外合作」の方式に固執していた點を追及され、「黨内合作方式」はコミンテルンの原則、革命的統一戦線結成の原則——を中國に適用する事を必要としたマーリンが國民黨側の態度を検討した結果、恐らくマーリン自身の判断によつて提案されたものであらうとされている。

著者は、コミンテルン、共産黨の文書によつて論をすゝめておられるが、國民黨側の動きについては殆ど論及されていないため、マーリンの判断が、どの様な情況判断に立つて下されたものであるかという點に關しては明確さを缺く憾みがある。

しかし、從來の二全大會宣言が「黨内合作」方式を予想していたと考ふる通説を改めるに足る説得力をもつ論文というべきであらう。

第二の論文は、一九二二年來の中國勞働運動の高潮を退潮にお

とし入れる契機をなした一九二三年二月の京漢鐵道ストライキの敗北が國民黨との「黨内合作」に消極的であつた陳獨秀の思想に如何なる變化を與えたかという點を論じてをられるもので、著者はこのストライキの敗北が、一九二二年八月杭州會議で決議された「國民黨内の國共合作」の方針を中國共產黨に強力に推進させる重要な契機となつたということを、陳獨秀の反應を手掛りとして強調されている。

第三論文は、武漢政府時代の共產黨運動の展開に重要な影響を與えたものとしてコミンテルン、陳獨秀、瞿秋白、毛澤東によつて代表される四つの革命コースを擧げ、各コースの内容及び、相互の理論的關係を明かにされている。

特に陳獨秀に對し共に批判的であつた毛澤東、瞿秋白が、農民運動に對する認識において必ずしも一致した見解をもつものではなく、又この見解の相違が農村工作重點主義の毛澤東コースを生む結果となつたのではないかとされる。

第三篇「ソヴェト革命および抗日線一戦線形成の時期」には「大革命敗退直後の中國共產黨」「李立三コース問題の一考察」「李立三コースとロシア留學生派」「江西ソヴェト期における抗日反帝統一戦線の諸問題」「西安事件の一考察」の五つの論文が收められている。

第一論文は、大革命敗退直後、共產黨が、國民黨政權と對決せんとする積極策を採用し、失敗した經過と原因を追求したもので

で、著者は失敗の原因として、(1)革命が退潮期に入つたことに對する明確なる認識を黨が缺いていたこと、(2)西歐的な革命方式である都市工作重點主義を中國へ機械的に適用したことを指摘、この點の誤りについてはコミンテルンも同斷で、等しく中國革命の特殊性―長期性・不均等性―についての正確な認識は有しなかつたとされている。

第二、第三の論文は、一九三〇年六月十一日の中央政治局の決議を中心として李立三コースの内容と、これに對するコミンテルンの批判を検討し「六月十一日決議」以前のコミンテルンの見解が李立三の見解と基本的に相容れぬものではなく、李立三の失脚は、寧ろ、ミフを背景とするロシア留學生派との權力闘争によるのではないかという見方をとつてをられる。

第四の論文は、江西ソヴェト期の抗日反帝統一戦線形成をめぐる、ロシア留學生派、毛澤東、コミンテルンの三者が、等しく「下からの抗日反帝統一戦線」という見解をとり、國民黨支配の轉覆が抗日のための前提條件であると考へていた點を明かにされ、一九三五年一月の遵義會議におけるロシア留學生派と毛澤東の主導勢力の交替を、この統一戦線政策の展開に關して、都市工作重點主義が失敗し、農村工作重點主義が革命の基本方針として採用された事によつて意味づけようと試みておられる。

第五の論文は西安事件をめぐる中國共產黨莫斯科の關係を論じたもので、事件の際、共產黨が蔣介石處刑説をとつてをり、後

に、モスコワからの指示により助命政策に變化したという米國務省「對華白書」等の見解に反論、「モスコワの演じた役割は、共產黨中央にその事件の處理の方針についてより大きな確信をあたえた程度のもので」とされている。

第四篇所收のものは、第二、三篇に展開された著者の議論の基礎の上にたつ中華人民共和國に關する時局的論文である。

「中華人民共和國三年の動向」は十周年を迎えた現在いさゝか舊聞に屬する嫌いが無いではないが、常に歴史的に物事を追求しようとする著者の意欲に裏付けされているために、現代の中國を理解する一助としての價値は今日も失われていない。次の、「中華人民共和國憲法の内容とその特質」は、云わば著者の前著「中國憲法史」の續篇ともいふべきものである。

「中共とソ連」、これは屢々論ぜられる中共の、ソ連に對する自主性について論じたもので、歴史的考察の末に、毛澤東と共に成長した中共の對ソ自主性は、強化こそされ、縮小される理由はないと論斷されているのは興味深い。

「附篇」には「アメリカの中國研究」「ロバート・C・ノース氏による張國燾回顧談記録」の抄譯と「華崗・五・四運動史」の書評とが收められている。

最初のもものは本年の「思想」九月號所收の貝塚茂樹氏の「アメリカにおける現代史研究」と併讀すればアメリカの中國研究の方向と現状を知るのに便であらう。

卷末には日・中・英語の參考文獻目録が附されているのも有難い。

現在、私には論文の箇々について立入つた批判をする余裕も力もないが、二、三氣の付いた點を記してみる。「中國共產黨史概観」において著者は、(1)「黨の成立と第一次國共合作の時期」(2)「ソヴェト革命の時期」(3)「抗日民族統一戰線の時期」(4)「第二次内戦と中華人民共和國の時期」という時代區分をとられている。

この黨史敘述上の區分については中國でも未だ統一の見解はない様で、胡喬木は「中國共產黨の三十年」の初版では、(1)黨の成立と第一次國內戰爭の時期(一九二一〜二七)(2)第二次國內革命戰爭の時期(一九二七〜三六)(3)抗日戰爭の時期(一九三七〜四五)(4)第三次國內戰爭と中華人民共和國の時期(一九四五以降)という時代區分を採用しているが、再版に當つては(1)と(2)の時期は「夫々、二つの時期を含んでいながら一つの時期にされている」といふふう誤解されやすい(再版序文)ので「時期」という字をけずつている。

更に、一九五八年に出版された王實、王翹他編の「中國共產黨歴史簡編」においては、(1)中國共產黨的創立、(2)黨在第一次革命戰爭時期、(3)黨在第二次革命戰爭時期、(4)黨在抗日戰爭時期、(5)黨在第三次國內革命戰爭時期と區分されている。

「簡編」は一九四九年以降の敘述を含まないから、その時期を含めば當然、六期として加えられるべきである。

著者が、胡喬木等と別に前記の區分を採用されてもそれは異とするに足りないが、「第二次内戦と中華人民共和國の時期」という最後の區分は本書の構成からみても——本書には「中華人民共和國の時期」という篇が設けられている——更には中國共產黨を發展史的に考察し理解する便宜上から云つても不都合ではあるまいか。

著者自身もことわつてをられるが本書が獨立した論文の集録であるため、各論文の導入部における重複が多く、一本として見た場合いさゝか冗慢さが目立つのは瑕瑾として惜しまれる。

しかし、非常に資料が乏しく、中國においてすら、資料整備の段階にある共產黨史の研究を、可能なかぎりの文献を利用し、B. I. Schwartz 等アメリカの學者の業績をも参照しつゝすゝめられる著者の意欲的な研究態度に敬意を表するとともに、戦后日本における中國共產黨史研究の最高水準を示す勞作として中國問題に關心を有せられる方々に一讀をおすゝめしたい。

弱輩の批評じみた紹介が、著者の眞意をそこねることの少きを希い擱筆する。(大澤一雄)

## 彙報

### 三田史学会例会報告

#### 第四六〇回例会

昭和三十四年十月十四日 於一〇番教室

ローマの没落とアウグスチヌス 近山金次氏

## おしらせ

昨秋発行の史学総目索引(創刊号——第三〇卷)の残部が少々ございますから御入用の方は御申込み下さい。

(頒価二五〇円)